

㊦ えらいことや

平成7年1月17日早朝、2階であったために一層大きく感じたのでしょうか、これまでに経験したことのない揺れで目を覚ましました。兵庫県南部地震です。終戦の前後、私が小学生から中学生であった昭和19年、21年、そして23年と引き続いて大きな地震がありましたが、そのとき以上の大きな揺れのように思いました。

私は、すぐに自動車で学校に走りました。幸い、渋滞もなく20kmの道のりを走り、学校に着きました。玄関のところで、M先生に会いました。

「防火扉が閉まっただけで被害はありません。南館を見てきます」
校区内ではありませんが、近くに住む彼はいつもより早く出勤してくれていたのです。彼の白い軍手が私の目に鮮やかでした。いつもより早く職員の顔がそろいました。子どもたちが「すごい地震だったね」と登校してきます。かける人が多いのでしょう。つながりにくくなった電話でしたが、

「私は出勤しますので学校に行かせます。よろしくお願いします」

「子どもは学校に出かけました。学校は大丈夫なんですね」

「こんな大きな地震があったのに、学校は授業するのですか」

「大きな余震で被害が出たら、誰が責任をとってくれるのですか」

いろいろな電話がかかってきました。

予測できない自然災害です。被災した家庭であれば登校どころではありません。また、通学路に障害があって登校できないとなれば出席を要しない日として扱うことになります。しかし、多くの子どもたちが登校し始めているのですから、いつものように児童を迎え入れ、安全を確認し授業を行いました。生駒市内や学校にも大きな被害がなか

ったのは幸いなことでした。

こんな地震はあまり体験しないことでしたが、暴風雨などの警報による休校は数多いことです。

「奈良県北部に暴風雨警報が発令されました」

気にしていた台風の接近で、こうしたニュースが入ると子どもたちの生活を担当する生徒指導部が活動を開始します。基本的なマニュアルはありますが、その都度の状況によって、どのようにするかを考えることが必要だからです。テレビに映し出される情報を見る、学校の前の川はどうなっているかを見に行く、生駒山中腹付近の様子、通学に使っている生駒ケーブル線の状況を知ることも大切です。こうした事柄に組織的に当たってくれるのです。

その日は、すでに届いている牛乳を飲ませ、パンは家に帰ってから食べさせることにして下校させました。なるべく早くしないとますます風雨が強くなりそうなのです。

どこの家にも電話があるようになってからは、こうしたときに連絡網を使ってそれぞれのお家に連絡をしていました。しかし、最近では少し様子が違います。「ただいま留守にしております。ファックスの方はそのまま送信してください。電話の方はピーという音のあとにお話ください。ピー」が増えてきました。この先が途切れてしまい連絡が流れないのです。ですから、プリントや学級懇談会などで、こんなときにはどのようにするかを説明し、家庭の理解を得ておくことになります。それでも、

「学校は避難場所に指定されているんだろう。そんな安全な場所からどうして帰らせるのだ」

という電話をいただきます。

たしかに、学校は避難場所に指定されています。でも、それとこれ

とは違います。自宅が土砂崩れなどの災害に遭い、あるいは、災害の発生が予想されるときに、家族そろって避難する場所なのです。学校から出られなくなったといった事態が生じれば別として、千人近い子どもたちを30数名の教職員だけで寝泊まりさせるところではないのです。学校には寝具も食料もありません。昼間の生活の一部ができるだけの場所なのです。

市の防災対策に関係する部署から「災害の発生が予想されますので体育館を避難場所に開放してください。避難者があった場合、市で対応しますから連絡してください」という連絡が来ることがあります。「市で対応します」と言われても、ほうっちはおけず、3泊もした年がありました。校長として勤務した2つの小学校は高台にあって風当たりの強い学校でした。雨にぬれる子どもたちの持ち物を運びこんだ後、ぐっすり眠ってしまい、朝になって「校長先生、一通り見回りましたが、被害はないようです」というH教頭先生の声に目を覚ましたことがありました。早朝に目を覚ました彼は、すでに校内を一巡してくれていたのです。「校長先生、教頭先生、夕食はまだなんでしょう」という近くに住む事務職員のMさんからの差し入れに舌鼓を打ったこともありました。

こうした自然災害以外にも、学校では、いろいろなことが起こります。子どもたちにかかわるいろいろな心配事があります。けがもあります。もめごともあります。「これはどうなってるんですか」という苦情もあります。保護者がお亡くなりになった、火災で焼け出されたといった子どもたちの家での不幸ごともあります。こんなとき、長年この学校に勤務し、地域の様子やしきたりをよく知っているS教頭先生や生徒指導担当のT先生は頼りになる存在でした。

スーパーマーケットや所轄の警察署から「万引きがありました」と

いった電話がかかってくることもあります。幸いにほとんどなかったのですが、どうしても欲しくてついつい手が出てしまったのでしょう。そんなとき学級担任の先生はそれぞれの子どもの実態に即した指導をしてくれます。学年をあげての指導、ときには生徒指導の担当者も交えての指導が行われます。校長や教頭の出番となることもあります。

そんなあとで、子どもたちを心情的にゆさぶりたい、こんな気持ちで次のような文章を学校だよりに載せたことがありました。平成3年11月22日発行の「でんしょぼと」第172号には、「小学校のころに読んだ話ですが、」と前置きをして、今でも印象に残っている「お金のない国」の話を書いています。

.....

ぼくは、街角に立って眺めた。いつもと様子が違っている。これまでに来たことのない町のように。「ここはいったい、どこなんだろう」ぶらぶら歩き始めた。魚屋さん、八百屋さん、どの店も美しい。お店だけではない。町中が美しいんだ。ちり1つ落ちていないし、道端には、きれいな花が咲いている。お菓子屋さんの店があった。おいしそうなお菓子がいっぱい並んでいる。

「長い間何も食べてないような気がする。お腹がすいた」

ぼくは、あるお店に入っていった。どれにしようかな。たくさんケーキ、甘い匂い。

「どれにします？」

「えーと、これはいくらですか」

「いくらって、どこから来たの？ この国では、お金がいらぬのよ」

「へーえ、これが、みんなただ？」

「そうよ。どれでも欲しいのを言ってちょうだい」

「じゃあ、これと、これと、それもください。ああ、それから、そっ

ちの大きなもの」

おばさんは笑い出した。

「どうしてそんなにたくさん欲しがくの。一度にそんなに食べられないでしょ。欲しいときに、また来ればいいじゃない？ お菓子は、いつでもあるのよ」

ぼくは、顔が熱くなった。そうだ、前に住んでいた国のくせなんだ。欲しいときに欲しいだけもらって食べればいいんだ。

これは童話です。町中の方が懸命に働いて物を作り、生活に必要な分だけを持って行って生活する。自由に、けれども節度をもって物を使う。そんな国の話です。未来の国は「こうなるんじゃないかな」と思いました。

まだ、そんな時代は来ていません。お金で物を売り買いして生活しています。それでいいんです。世界中が、こんなルールで成り立っているのですから。

でも、ときにはルール違反があったという電話がかかってきます。「万引き」いやなこの言葉。この言葉のない国にしたいのです。

.....

危機管理という言葉が聞かれるようになって久しいようです。国でも、地方自治体でも、学校でも、いざというときにどうするかをしっかりと考えておくことが大切です。けれども、何かあったときに責任を追求されると困るから、一応あのことも注意しておこう、このことも話しておこうといったことになったり、問題が起きると困るからと教育活動が萎縮したり、なおざりになったりするということがあれば、それは本末転倒であると思います。